

## もっと自然体で生きていこう

最近、「命」に係わる報道で気になるものがあった。その内容は、女性の加齢不妊を回避するために、『健康な女性』の卵子を凍結する施策」を医療機関と自治体が連携して推進する、というものであった。正直、少し違和感があった。

ここで誤解が無いように申し上げておくが、私は不妊治療やその対策に反対しているわけではない。困っている、苦しんでいる人を助けることは医療の使命だからである。

ニュースでは、「晩婚化・晩産化」が進み、加齢で妊娠が難しくなるから、その原因の一因である「卵子の老化」を回避するため「20歳～35歳くらいの健康な女性の卵子を凍結保存する」と言っていた。もちろん「産み時」を考えてもらうことが先決だとも報じていたが。

何故この報道に違和感を持ったのか……。それは、何とんでも、「人の体に自然ではない」と感じたからである。

私たち人間も、「生き物」の一角を占める存在である。それ故に、太古の昔からさまざまな環境の中で生き延び、そのプロセスでさまざまな能力を獲得してきた。

人は、生まれてから日々成長し、子ども時代を過ごす。やがて、第二次性徴期を迎えて次世代を残す能力を発現する。そして、次世代を担う子どもを産み・育て、子どもが独り立ちしていく姿を見届け、自分の生を全うしていく。大雑把ではあるが、人はこのようなライフサイクルを獲得し、命をつないできたのだろう。

このライフサイクルに思いをはせてみると、実は「母体」には、次世代を担う子どもを体内に宿し育み、そして産むのには「適した時期」がある、ということである。

先に記載したニュースでは、「卵子の老化」を回避するための施策を紹介していたが、卵子を育む母体も時間とともに老化していくことを忘れてはいけない。

そもそも適切な時期に次世代を担う子どもを「妊娠」・「出産」できない「現実」があるからこそ、このような議論が出てくるのである。（女性は必ず子どもを産むべきだと言っているわけではない。そこには、自由意思があることを申し添えておく。念のために。）

その「現実」とは、一番顕著なものは長時間労働であろう。また、女性が「妊娠」・「出産」という次世代に命をつなぐ大仕事をしているにもかかわらず、仕事との両立を阻害するさまざまな「ハラスメント」やキャリアアップを難しくしている状況があることなどもその要因であろう。だから、これらを解決することは急務であり、待たなしであることを私たちは心しておかなければならない。

さて、先に述べたライフサイクルに再び思いをはせれば、「命をつなぐ」ことの大切さもさることながら、「自身の命を健全に全うする」ことの難しさも見え隠れする。具体的に言えば、過労死やメンタル疾患などの増加である。これらの原因の一つである長時間労働では、適切な睡眠時間を確保することは難しく、それ故に健康を害してしまうことは容易に想像できる。

人は太陽が沈み暗くなれば眠り、一日の疲労を解消する。そして、太陽が昇れば目を覚まし、その日一日を、生きる糧を得る為に働く。しかし、先にも述べた長時間労働のもとでは、このサイクルを回すことが難しいことになってしまっている。

ここでも誤解のないように申し上げるが、病院の夜勤や消防署の夜勤、そしてシステムのメンテナンスなど、人の持つ一日のサイクルに合わせる事が難しい仕事を否定しているのではない。これらの仕事は、私たちの社会に必要な不可欠なものであることは百も承知である。

ここで言いたいことは、私たちの体に備わった一日単位のサイクルを十分に意識した働き方、シフトの組み方などを、今以上に考えていくことが「自身の命を健全に全うする」ことにつながるだろうということである。

人には、生きていく上で適切なサイクル（適切な時期）がある。私たちはもっとそのことを大切に、自然体で生きていけることを模索してもよいのではないだろうか。

この機会にじっくりと考えてみてはどうだろう。

（連合総研主任研究員 伊東雅代）